

さいたまここに人あり

つながりつづける 「居場所」を地域に



全国子ども食堂支援センター
むすびえ 理事長
ゆあさ まこと
湯浅 誠さん

気持ちをかたちにするための「器」

子ども食堂はいま全国で4000カ所を超えて広がっている「ムーブメント」

と云ってよいと思います。それぞれをみるとほとんどがボランティアで運営され、月に1回の開催など非常に小さな力ではありますが、2018年から19年の1年間で1400カ所増えています。地方に行くとも商店街はシャッター通りになってしまっていて、買い物をする人

プロフィール 社会活動家。東京大学先端科学技術研究センター特任教授。全国子ども食堂支援センター・むすびえ理事長。1969年東京都生まれ。東京大学法学部卒。東京大学大学院法学政治学研究科博士課程単位取得退学。1990年代よりホームレス支援に従事し、2009年から足掛け3年間内閣府参与に就任。内閣官房社会的包摂推進室長、震災ボランティア連携室長など。法政大学教授（2014～2019年）を経て現職。政策決定の現場に携わったことで、官民協働とともに、日本社会を前に進めるために民主主義の成熟が重要と痛感する。著書に、「子どもが増えた！人口増・税収増の自治体経営」（泉房穂・明石市長との共著、光文社新書、2019年）、「なんとかする」子どもの貧困（角川新書、2017年）、「ヒーローを待たなくても世界は変わらない」（朝日新聞出版、2012年）、「反貧困」（岩波新書、2008年、第8回大佛次郎論壇賞、第14回平和・協同ジャーナリスト基金賞受賞）、「貧困について」とことん考えてみた（茂木健一郎と共著、NHK出版、2010年）など多数。ヤフーニュース個人に連載中の「1ミリでも進める子どもの貧困対策」で「オースカーアワード2016」受賞。法政大学の教育実践で「学生が選ぶベストティーチャー」を2年連続で受賞。「子ども食堂安心・安全プロジェクト」でCampfire Award 2018受賞。他に日本弁護士連合会市民会議委員、文化放送「大竹まことゴールデンラジオ」レギュラーコメンテーターなど

たちが立ち話をするような光景は見かけなくなりました。人が歩いているのもあまり見かけないくらいです。子どもが遊ぶ姿というのでも少なくなりましたね。子

どもが多い地域であっても、「公園では静かに遊びましょう」などと言われ、遊ぶ場所が奪われている状態です。こういったことから非常に淋しくなった地域のなかで人びとが交流する場をつくらうと思ったときに、「難しいことはできないけれど、いっしょにごはんをつくって食べることならできる」ということで、気持ちをかたちにするための「器」として、こども食堂を始める人たちが増えたのではないかと思います。こども食堂を運営しても、自治体や国から補助金などの運営資金が出るわけではありません。全国的に見ると5%から10%くらいの自治体では補助金を出していますが、自分たちのお金で運営していることがほとんどです。国が政策化した事業であれば別ですが、ボランティアの活動でこれだけ広がるといえるのはあまりないことです。

子どもの貧困対策と してのこども食堂

7割から8割のこども食堂は、利用できる子どもを限定していませんし、子ども

もだけではなく大人も来ていい場所になっています。こども食堂は地域交流の場であると同時に、子どもの貧困対策の場でもあります。こども食堂には金銭的に余裕がある家庭の子どもも来ますし、貧困世帯であったり、家庭に課題を抱えているような、いわゆる「気になる子」も来ます。その点は学校と同じですね。クラスにいるそういつた子どものことを気にかけている先生もたくさんいるのではないのでしょうか。こども食堂の人たちは、気になる子がいると、その子のために自分にできることを考えて支援しています。

あるこども食堂での話です。コロッケを出したところ、小学5年生の男の子が「これなに？」と聞いてきたそうです。そこでこども食堂の人たちは「そうか、この子は5年生になるまでコロッケを食べたことも見たこともなかったのか」ということに気づいたんですね。それまで「よく食べる子だな」とは思っていたけれど、それがただよく食べるだけなのか、家庭で食べることができていないのかまではわかりませんでした。でもこの件で、家庭になにかありそうだなということに気づいたわけです。そのあとどう

したかというところ、「今度はメンチカツを出してみよう」ということになったそうです。学校給食では気になるひとりの子どものために献立を変えることはできませんが、こども食堂はそれができる身軽さがあります。

別のこども食堂で、小学2年生の男の子といっしょに食事をしました。「はじめて来た」という子でした。「おかあちゃんに行つてこいって言われた」と言うんですね。これもいろいろな背景が想像できます。楽しそうな場所だから行つておいでと言つたのかもしれないし、食事をつくるのがめんどうだったのかもしれない。それも今日だけなのか、普段からそうなのかはわかりません。子どもにも根ほり葉ほり聞くわけにもいきません。このことをこども食堂の人に話すと、その子が帰るときに「あまっちゃったから持つて帰つてくれるとうれしい」と言つておにぎりをたくさん持たせていました。これは家庭に対するメッセージなんです。その子の家庭がどんな状況なのかはわからないけれど、「私たちはあなたたちのことも気にかけています。もしよかつたらこども食堂に来てください」という意味でのメッセージです。こういう

たかわかりを、気が付いたときにできるのがこども食堂のいいところです。こども食堂を運営しているのは、いわゆる「プロ」ではなく、素人です。素人だからこそ気がつくこと、できることがあって、来た子どもたちが元気になる。そういう意味で、子どもの貧困対策にも深い関わりがある場所です。

「黄信号」の人にも 目を向ける

貧困問題は一部で熱心にとりくむ方々がいるのですが、一般の人たちが関わってくれるかと考えると、やはりとっつきにくさがあるのだと思います。貧困や虐待の問題は深刻なケースが報道されることが多いので、「自分になにかやれる気がしない」と思ってしまうんですね。その点で、こども食堂は爆発的に貧困問題にかかわる人たちの裾野を広げました。「料理できるから」「おしゃべりできるから」という、自分でできる範囲で関わっている人たちがたくさんいます。それでいいんです。最初から「貧困問題をなん

とかしなれば」と思わなくてもいいんです。地域のいろいろな人たちと関わり続けることが大事で、こども食堂はそのための入り口の敷居が低く、とっつきやすいんですね。私はこども食堂は「貧困問題のイノベーション」だと思っています。このやり方を私自身は思いつけませんでした。ですので、こども食堂の広がりやブームで終わらせたくない、定着させたいという気持ちで関わっています。

いま、子どもの貧困率は13.5%です。人数にすると270万人。その大半は見ただ目にはわかりません。大人もそうです。すれ違っても全然気がつかないようなホームレスの人たちが多くいます。私は30年間、貧困問題に関わってきましたが、政府がはじめて貧困率を発表したのが2009年です。政府はそれまで「貧困問題は過去のこと」としていましたし、一般的にもそう思われていました。そういう時代に、「いまも日本社会に貧困はあるんだ」と理解してもらうためにどうしたかという、極端に厳しい事例を前面に出すことにしたんです。そうしないとマスメディアもとりあげてくれません。そうするなかで、私自身が貧困の厳しいイメージを固定化してきてしまったとい

う反省があります。

いま、「貧困は日本社会にある」と多くの人が認識する時代になりました。これからは見た目にはわからない相対的貧困状態の人たちのこともみんな考えていかなないと貧困の問題は解決しません。厳しい「赤信号」の人たちだけにフォークラスするのではなく、見た目にわからないけど、崖っぷちにいる「黄信号」の人たちにも目を向けてもらうことが必要です。こども食堂はまさに「黄信号」の子どもが行ける場所なんです。誰が行ってもいい場所なので「青信号」のふりをして行けるんです。たとえば学校の相談室は、行けば子どもたちのなかで噂になることもあります。相談室は「赤信号」の子どもが行く場所だと、本人もまわりの子どもたちも思っているからです。そうすると「黄信号」の子どもは相談室へはなかなか行けません。私は「赤信号」を強調してきた人間として、責任を持って「黄信号」の人たちに対応できる状態をつくらなければならぬと思っています。その点でこども食堂の普及は大きなポイントになります。ここに私自身の活動とこども食堂とのつながりがあります。

コロナ禍でもつながりつづける

教育には国語や算数などの「教科学習」と、遊んだりいろいろな人とかかわりのなかで子どもが成長していく「非教科学習」があります。コロナ禍のなかで、「教科学習」の面では学習格差の広がりなどが問題になっていますが、「非教科学習」の面でも心配なことがあります。

学校では休み時間に話をしたり校庭で遊んだりすることが「非教科学習」となって、子どもたちのコミュニケーションする力を培ってきていたと思いますが、一斉休校となり、その時間がなくなりました。地域のなかでも遊べる場所が減ってきているなかでのコロナ禍です。子ども同士で遊ぶことがほとんどなくなりました。学校で「マスクをつけましょう」「距離をとって話すように」と常に言われている子どもたちは、それが当たり前だと思ってしまうようになります。人との距離を密にすることはいけないことなんだと思ってしまう子どもたちが大人になったときに、身体感覚がいまとは大きく違って

くるのではないかと心配しています。

子ども食堂は「居場所」です。コロナ禍で、その居場所がひらけなくなりました。でもかたちを変えて活動を継続している人たちがたくさんいます。「フードパントリー」と言ってお弁当や食材を配布する活動です。一斉休校の最中、気にかかる子どもの家庭に連絡していた先生もいると思いますが、基本的には子どもの生活は家庭にまかされました。子ども食堂もしばらく休止してもよかったです、実際にそうしていた人たちもいます。フードパントリーを開催することで「人が集まる場所をつくるな」と非難されることもありましたが、それにもかかわらず、つづけたのはなぜかという点、課題を見ずにつながりつづけることを優先したからです。「居場所」とは、つながりつづける場所なんです。食事の提供ができれば食材を配布するといったように、かたちを変えてもどうにかしてつながりつづけるようにすること。ここに「居場所」の本質があるということに、改めて気がつきました。

お金を持っていない仕事があっても「生きづらさ」を抱えている人はいます。それがどこから生まれてくるのか考える

と「自分にはつながりつづけてくれる人がいない」ということからなのではないでしょうか。「居場所」はそれに直接働きかけることができる場所です。子ども食堂の人たちはみなさん「うちは食事を提供しているけど、食事だけの場所ではない。あなたとつながりつづける場所です」と言います。子どもや高齢者などの世代にかかわらず、つながりつづけるための場所がたくさんあれば、「生きづらさ」を感じる人は減るはずだと、コロナ禍で確信しました。がんばっている若い人たちも、一方では「生きづらさ」を感じている人もたくさんいます。大人の役割として「居場所」を増やすことで、若い人たちがいい方向に伸びていける社会的条件を整えたいと思っています。

知らない人たちがやっていることも食堂を「子どもたちに紹介しても大丈夫なのか」と心配する先生もたくさんいます。でも、子ども食堂の人たちは、先生方と同じように子どもの育ちを応援しています。先生方ももしかしたらできないかもしれない部分も含めて、つながりつづけるようとしてくれる場所です。地域にこういった「居場所」が増えていくのを歓迎してもらえるとうれしいです。